



佐々先生の 海外・帰国 あれこれコーナー

このコーナーでは、いろいろな立場の人たちの声を聞きながら、特に海外に住んでいる保護者の方々に役立てていただける情報や、参考になる考え方を提供していきます。

取り上げてほしいテーマ、ご意見、ご感想などをお知らせください。皆様の声を聞きながら、このコーナーをできるだけ実際に役に立つものにしていきたいと思っています。連絡は、Eメールで、sasa@keimei.ac.jp までお願いいたします。

啓明学園中学校・高等学校 校長 佐々 信行（さっさ のぶゆき）

ハンブルク補習校、帰国子女受け入れ担当（横浜市）、日本語イマージョン・プログラム教諭（バージニア州）・ワシントン補習授業校を経て、現職。

バイリンガルの育て方（1）

先日、啓明学園の海外入試に際して、ニュージャージー補習授業校で、「バイリンガルの正しい育て方」という題でお話をさせていただきました。2回にわたって、そのときの内容をご紹介します。

私も長く補習校で教えていましたので、土曜日のこの雰囲気をとてまつかしく感じます。補習校では、生徒も先生も、月曜日から金曜日までの勉強や仕事を終わらせてから土曜日の準備に取りかかることが多くなります。金曜日の夜は徹夜のようにになってしまうこともあります。そんなとき、生徒も同じようにがんばっているだろうと思うと、とても親近感を覚えます。二つの学校の勉強をこなしていくことはとてもたいへんなことですが、苦労した分は必ず力になって身につけているにちがいないと思います。そんなところも就職のときなどに帰国生が評価される一つの理由になっているはずです。

苦労といえば、海外での苦労の第一は、言うまでもなく言語です。アメリカに住み、英語で苦労するからには、英語と日本語を自由に使って、たくさんの人とコミュニケーションをすることができるバイリンガルに育ってほしい、それは、お父さん、お母さんの当然の望みでしょう。しかし、すでにみなさんがよくお分かりのように、アメリカに住んでいれば自然に英語が上達するというほど簡単なものではないし、場合によってはどの言葉も十分にできないといういわゆる「セミ・リンガル」という状態になってしまう恐れもあります。

啓明学園の帰国生たちの様子をご紹介しながら、二つの言葉をどのように育てていけばよいのか考えてみたいと思います。

◆カルチャー・ショックを克服したとき

Aさんは7歳から10歳までアメリカで、10歳から13歳までヨーロッパで過ごしました。ヨーロッパにいたときもインターナショナルスクールに通っていたので、学習言語は英語でした。中学2年生の時帰国して啓明学園に編入しました。小さいときから外国で生活していたので、「帰国」といっても、自分の国に帰ったという気持ちにはなれなかったようです。だれもが不安定な心になりがちな「反抗期」とよばれる年齢ということもあったでしょう。新しい日本の環境がなかなか受け入れられませんでした。「日本のこれは許せない」と泣くこともよくありました。当然のことながら、日本語の力は思うように伸びませんでした。

幸いなことに、啓明学園には帰国生が多いので、彼女の気持ちを理解してくれる友だちがいるし、遠慮なく英語で話せる仲間もいました。「取り出し授業」のためにやってくる国際学級が「自分の居場所」となり、心を休めるところになったようです。インターナショナルスクールのときと変わらないレベルの授業で英語の力がついていくのを実感できたことも、自信となって彼女を支えたことでしょう。



ハレルヤ・コーラス